

平成 29 年度共通教育アンケート（1 年次生対象） 実施報告書

大学教育センター
全学共通教育部門長 大塚 豊

1. アンケートに対する学生の取り組みと周知方法について

・平成 29 年度の学生対象の共通教育アンケート調査は、共通教育を中心とした学修についての、自由記述を含む 41 項目の設問により、当初平成 30 年 1 月 18 日（木）～2 月 28 日（水）の予定で実施した。しかし、最終日間近の 2 月 26 日になっても全学の平均回答率が 44.1%と低調であったため、3 月末まで実施期間を延長した。その結果、最終的には 56.8%まで上昇し、これは前回の平成 28 年度調査（2017 年 1～2 月実施）の回答率 49.9%に比べると、いくぶん高いものの、なお改善の余地がある。学部毎の回答率は、経済 29.5%（昨年度は 29.0%、以下、括弧内の数値は平成 28 年度のもの）、人間文化 67.4%（54.7%）、工 59.4%（63.2%）、生命工 62.8%（55.3%）、薬 83.9%（49.7%）であった。薬学部の回答率の高さおよび昨年度に比べて協力の度合いが上がったのに対して、経済学部の回答率の低さが目立っている。学科別に回答率を見ると、生物工 95.3%、薬 83.9%、心理 75.0%、建築 74.7%、メディア映像 72.4%などが高い一方、国際経済 21.1%が最も低い回答率になっている。次年度以降、回答率の低かった学部・学科を中心に、よりいっそうの周知徹底を行うことなどが望まれる。

2. 所属学部・学科のカリキュラム理解度および大学教育センターの学修支援体制理解度

・所属する学部・学科のカリキュラムマップについて、12.6%の学生は「よく理解している」、48.5%は「だいたい理解している」と回答しており、学部間に理解度の差は見られないが、薬学部の回答者のうち 8.3%が「まったく知らない」と答えており、昨年度も 6.1%と他学部に比べて高い比率の学生が理解度の低さを示していたことから、カリキュラムの構成に関する学生への説明方法の改善など、改善の余地がなお残っているように思われる。

・次に、大学教育センターが行っている各種の学修支援については、「まったく知らない」と回答した学生の割合が、前回の 23.9%から今回は 15.39%に低下した。学修支援相談室および 数学基礎力 UP 講座に関する認知度はそれぞれ、前回調査の 32.6%、32.6%に比べて今回は 32.3%、29.6%とごくわずかながら低いが、一方 eラーニングシステムについては、逆に前回の 10.9%から今回の 22.9%へ、大きく上昇した。eラーニングシステムが利用可能であることだけは知られるようになってきていると思われる。利用した学生による感想を自由記述に見てみると、「分かりやすい」「スマホからできるから便利」「解答のところに解説が載せられていたので分かりやすかった」など、高く評価されていることが分かる。しかし、一方で「内容が少ない、他の英語勉強アプリと比べれば使いづらい」「アクセスした際に不具合が生じることがたまにある。」「難しい問題に限って解説が不十分で分かりにくいことがあったので、詳しく記載して欲しい。」といった、使いづらさの指摘も見られる。eラーニングシステムを含む、各種学修支援の広報活動に関する学生への周知機会拡充・方法の見直しを行うとともに、ソフトの内容精選の努力がさらに必要であろう。

・学修支援相談室を「まったく利用したことがない」と答えた学生に、その理由を尋ねたと

ころ、「利用する必要がない」の選択肢を選んだ学生が29.5%と最も多く、「場所が分からない」22.8%、「時間が合わない」18.3%がこれに次いでいる。新入生のオリエンテーションに際して、学修支援相談室を学内施設の見学に組み入れるなどの措置をよりいっそう実施することが望まれる。また、数学基礎力UP講座を利用したことがないと回答した学生に関しても、その理由としては「利用する必要がない」39.7%、「時間が合わない」22.4%、「場所が分からない」15.8%となっており、これらの数値は昨年度とほぼ同様である。開催場所等の情報は本学HP・掲示板等で公開されているが、学生に浸透していないことを示すものである。

・高校までの科目を復習する授業すなわちリメディアル教育の必要性については、「必要である」が46.7%、「まあまあ必要である」と回答した学生の割合は33.1%で、これらを合算すると、79.8%もの高い割合の学生がリメディアル教育に対する必要性を感じているのである。これらの必要性を感じている学生に対して、学力補填を望む科目を尋ねたところ、上位から順に英語21.7%、数学18.8%、化学15.4%、生物14.9%となっている。

3. 共通教育全体について

・「共通教育科目で充実していると思われる科目群」は何かという設問では、昨年度に次いで、教養ゼミが20.1%と、最も多くの学生によって選択された。とくに薬学部が23.7%、人間文化学部が23.0%と、高い比率を示している。教養ゼミに次いで、日本語表現17.1%、情報リテラシー16.2%、教養科目D群[思索と創造]11.4%、英語11.2%の順になっている。これらは昨年度もまったく同じ順位であり、担当教員の努力の成果と言える。

・「入学当初、共通教育に期待していたこと」は何かという設問では、上位から「専門での勉強の基礎」18.1%、「専門以外の幅広い知識・教養」16.9%、「実用的な知識・技能」14.2%、「学生同士の交流」11.8%等の順になっており、前年度調査結果と同様の傾向を示している。これらの「期待内容に関して、どれほどの期待達成度あるいは満足度が得られたか」を%で回答することを求めたところ、満足度70%以上と回答した学生が最も多く、その割合は11.5%である。また、満足度100%~70%の学生が全体の24.4%を占めた。この数値は昨年度の25.9%に比べて、若干ながら低下した。

・上述したとおり、共通教育科目群の中では教養ゼミが最も充実しているとの回答であったが、初年次教育科目として開設されている教養ゼミを履修して良かった点については、上位から「高校生活（学習）から大学生活（学修）へスムーズに移行できた」22.8%、「大学生としての学修スキルが身についた」11.6%、「コミュニケーション能力が向上した」10.7%等の順になっており、これら3選択肢のみが2桁の比率を占めている。一方、改善点については、「特に改善点はない」という回答が36.2%と最も高い比率であるが、これに次いで「学生の関心に対応する授業内容にして欲しい」16.1%、「授業の進め方をもっと工夫して欲しい」10.0%等の要望も出されており、これらの項目は昨年度の比率の10.9%、9.5%よりも選択した学生が増えている。教養ゼミの内容と授業の進め方について、改めて見直す必要がある。とくに「学生の関心に対応する授業内容にして欲しい」に関して、薬学部は昨年度の8.8%から19.3%に、人間文化学部は7.5%から13.8%に上昇している。

・本学で創設以来続いている教養講座に関しては、「幅広い教養が身についた」24.5%、「知的好奇心をくすぐった」23.1%、「芸術・文化にも触れられてよかった」20.0%等のポジティブな回答の比率の高さが目につくが、一方で「あまり興味の持てないような内容が多かった」12.4%、「難しい内容が多かった」8.5%というネガティブな回答の比率にも注意すべき

である。今後も講師の人選に当たり、幅広い候補の中から慎重な検討を続けていくことが求められる。

4. 語学・リテラシー科目について

・「日本語表現」については、上述したとおり「共通教育科目で充実していると思われる科目群」を問うた質問で教養ゼミに次ぐ高い支持を得たが、科目として「とても満足した」、「ある程度満足した」と回答した学生の割合はそれぞれ 20.5%、49.9%であり、昨年度のそれぞれの割合 18.5%、46.6%よりも上昇した。その授業の時間数と難易度に関しては、「今の程度の時間数や内容でよい」65.7%は昨年度の 69.0%より下がり、「今よりも少ない時間数や内容でよい」が昨年度の 16.6%から 20.7%に上がっている。日本語表現科目の良かった点を尋ねたところ、「日本語の基礎力が向上した」34.8%、「レポート作成に役立つ」20.5%と、昨年度のそれぞれの比率 34.5%、18.4%よりわずかながら上昇し、一方、「文章表現力が向上した」は昨年度の 24.0%から 19.4%に下がった。

・「情報リテラシー」は、共通教育科目群の中で充実している科目の一つと見做されたが、「とても満足した」が 27.8%と昨年度の 23.2%より比率があがった。学部別に見ると、「とても満足した」と回答した学生の割合は、薬学部の 36.7%、人間文化学部の 36.3%などが高く、一方、工学部で「とても満足した」とする学生は 11.5%に留まり、昨年度の 15.3%よりも下がっている。「情報リテラシー」科目の時間数と難易度については、「今の程度の時間数や内容でよい」が 76.3%であり、「今以上に時間数や高度な内容が必要」の 11.2%を大きく上回っている。より具体的に「情報リテラシー」科目の良かった点を尋ねたところ、「レポート作成に役立つ」23.6%、「ICT を使用する技能が身についた」22.2%、「ICT を使用して情報収集・分析・処理能力が身についた」15.0%、「情報倫理（情報モラル・情報マナー）が身についた」14.5%の順になっている。

・「英語科目」については、「とても満足した」22.3%、「ある程度満足した」44.6%であり、「とても満足した」と回答した学生の割合を学部別に見ると、薬学部 30.0%、経済学部 24.3%、生命工学部 20.3%、工学部 18.3%、人間文化学部 17.6%の順になっている。授業の時間数と難易度については、67.9%の学生が「今の程度の時間数や内容でよい」と回答し、昨年度の 73.1%より下がり、「今以上に時間数や高度な内容が必要」と回答した学生が昨年度の 12.4%から 17.0%に上がっている。この数値に関して、学部間では大きな差は見られないが、「今よりも少ない時間数や内容でよい」とした学生が、経済学部で 20.3%、薬学部で 17.5%と、他学部の 7～8%台の比率よりも高くなっている。また、英語科目の良かった点については、「英語の能力（辞書があれば英文を読める力等）が向上した」25.9%、「英語を学習する楽しさを実感した」16.3%、「コミュニケーション能力が向上した」13.8%、「能力別クラス編成が適切であった」10.6%等の順になっている。この傾向は昨年度と同様である。英語に関する自由記述意見には、「英語を基礎から教えてもらえる教科が欲しい」「留学生に向け、ちょっと難しい英語の授業がほしい」と英語教育に対する学生のニーズの幅を感じさせるものが見られた。「英語のクラス分けが適切でないし、クラスによって小テストなどの負担が違いすぎる」など率直な意見が見られる。

・アンケートに回答した学生のうちでは、「初修外国語」の選択に関して、51.6%が中国語、25.6%がドイツ語、22.8%がフランス語を履修している。昨年度のそれぞれの語種の比率は 62.2%、29.0%、8.8%であり、中国語、ドイツ語の履修者が減り、フランス語が増えたことが分かる。これら初修外国語 3 言語の学修に関して、「とても満足した」は 26.3%、「あ

る程度満足した」は 45.5%であり、「あまり満足しなかった」4.8%、「まったく不満だった」4.5%を大きく上回っている。授業の時間数と難易度についても、73.6%の学生が「今の程度の時間数や内容でよい」と回答している。「初修外国語の良かった点」については、「初修外国語を学習する楽しさを実感した」が 27.2%と最も高い割合であり、次いで「初修外国語の能力（辞書があれば原文を読める能力等）が向上した」19.0%となっている。

5. 教養教育科目について

・教養教育科目（A～F 群）総体として見た授業時間数と内容については、「今の程度の時間数や内容でよい」と回答した学生の割合 78.8%は昨年度の 81.7%より下がり、逆に「今以上に時間数や高度な内容が必要」が昨年度の 5.1%から 7.9%にわずかながら増加している。

・教養教育科目履修の際に特に重視した点については、上位から「知的好奇心を満たす」33.9%、「資格取得」22.3%、基礎学力の向上」20.9%等の順になっている。教養教育科目を履修した結果、良かった点については、上位から「幅広い教養が身についた」29.7%、「知的好奇心を満たした」24.8%、「基礎学力が向上した」14.4%等の順になっており、この傾向や数値は昨年度とほぼ同様である。

6. キャリア教育（1年次履修のキャリアデザインⅠ）について

・「キャリアデザインⅠを受講して将来役立つ力が身に付いたと思いますか？」と、この科目に対する満足度を尋ねたところ、「とても満足した」13.8%、「ある程度満足した」43.4%であり、昨年度のそれぞれの数値 13.4%、40.9%に比べて、これらポジティブな回答がわずかながら増えた。授業の時間数と難易度については、「今の程度の時間数や内容でよい」62.9%、「今よりも少ない時間数や内容でよい」20.3%が、「今以上に時間数や高度な内容が必要」の 6.9%を上回っている。

・キャリアデザインⅠを履修して良かった点については、上位から「自己分析ができた」26.5%、「社会人基礎力がついた」13.3%、「将来の目標ができた」11.9%等の順になっている。学部別の回答状況を見てみると、他の学部では項目により昨年度に比べて向上したところと下降したところがある中で、人間文化学部についてはすべての項目に関して昨年度に比べて大幅な比率の上昇が見られる。すなわち、同学部の場合は「コミュニケーション能力が向上した」は昨年度の 2.9%から 14.1%に、「グループディスカッションの方法が身についた」と考える学生が 2.9%から 9.8%に、「自己管理能力が身についた」は 0%が 7.8%に伸びているのである。29 年度に担当者によって「キャリアデザインⅠ」の授業内容が大幅に見直されたことにより、効果が目に見える形で現れたと言ってよかろう。

・「卒業後、社会で求められる力を身に付ける授業を受講したいと思いますか」という設問に対する回答は、「是非とも受講したい」28.2%、「ある程度受講したい」47.7%、「どちらともいえない」18.3%である。本設問は「卒業後、社会で求められる力を身に付ける授業」という言葉の意味するところがキャリア教育と結び付けて捉えられたか否か疑問が残るところもあり、設問の再考を要するようと思われる。また、自由記述意見の中には、「キャリアデザインという授業の必要性は重々理解しておりますが、もう少し授業内容を考えないとキャリアデザインという授業が必修科目の意味がないと思います。」「要点をまとめたら一時間で終わるような話をだらだらと聞かされ、話す内容の 90%が自慢話。」「単位で生徒を釣り、発表会らしき行事の参加人数を増やしていることをナンセンスだと思った」など辛辣な批判もあったことを深刻に受け止めたい。

7. 学生の学修意欲について

・本年度1年次生における学修意欲についての質問項目では、入学時に「非常に意欲あり」28.6%、「まあまあ意欲あり」54.0%と自己分析している。この数値は前期終了時にそれぞれ19.1%、58.0%であり、さらに学年末に当たる今回の調査実施時には21.1%、56.4%と、ほぼ横ばい状態であるが、「非常に意欲あり」に落ち込みが見られる。一方、「あまり意欲なし」、「まったく意欲なし」と回答した学生の合計の割合は、入学当初3.5%、前期終了時4.5%、学年末3.8%と、ほぼ一定している。これらの学修意欲を持ってない、あるいは維持できない学生層に対する取り組みは、留年や退学防止の上からも依然として大きな課題として残っている。

8. アンケート調査結果を踏まえた今後の改善策

以上述べてきたアンケート調査の結果を踏まえ、また、本文では触れなかった自由記述意見にも適宜言及しながら、全学共通教育の現況と改善策について今少し述べることで、本報告の結びとしたい。

まず、全体としての回答率が平成28年度に比べて若干上昇したものの、56.8%と6割を切っている。回答率は共通教育への関心のバロメーターとも言える。大学教育センター運営委員会の委員である各学科長を通じて調査への協力を学生に呼びかけ、またゼルコバや学生への一斉メールでの回答要請以外に呼びかけを行ったにもかかわらず、この回答率である。このことに関して、やはり学科長および担任から学生への注意喚起が最も効果的と思われるので、引き続き協力要請を粘り強く続けて行かねばならない。

大学教育センターが行っている各種の学修支援については、「まったく知らない」と回答した学生の割合が低下し、認知度がいくぶん向上してきたことを窺える。新入生オリエンテーションに際して、学部・学科によっては、学内各施設への新入生の案内ルートに学修支援相談室などを組み入れるところが増えてきたことも奏功しているのではないかと思われる。関係学部・学科の協力に感謝するとともに、いっそうの協力を要請したい。

初年次教育として重要な意義を有する教養ゼミが多くの学生によって「充実している科目」のトップに挙げられた。但し、「教養ゼミの授業は何がしたいかわからない。なくてもいいと思う」「改善策が見当たらないのでそのままでもいいと思います。」といった消極的な自由記述も見られた。ごくごく一部の意見であるとはいえ、各学科において教養ゼミの授業内容を絶えず見直すことも必要であろう。日本語表現、情報リテラシー、教養科目のとくにD群[思索と創造]、英語なども高く評価された。キャリア教育も一部に辛辣な批判が見られたものの、全般的には比較的高い評価であった。とくに、授業内容を一昨年に比べて大きく変えた人間文化学部対象の授業では明確に好ましい変化が生じたことは喜ばしい。授業内容や方法の改善が学生の肯定的な受け止め方に直結することを示した好例であろう。

全体として「もっとコミュニケーションのある授業を増やしてほしい。」という自由記述も見られ、共通教育各担当教員のいっそうの努力により、質の高い授業が展開されることを期待したい。と同時に、共通教育の仕組みに関して、「体育や陶芸、音楽に興味のない人でも嫌々選ぶことになった人が大勢いると思う。そもそも強制的に～群から1つ～のような履修のさせ方はやめてほしい。もう少し自由の効く履修であったら学習意欲も上がるし自分の本当の能力を向上させられるのでは、と思う。」のように、共通教育科目の履修の在り方に関する意見も見られた。真摯に受け止め、改善策について検討する必要がある。

以上